

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
198	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Mortality risk among offspring of psychiatric inpatients: a population-based follow-up to early adulthood. 精神科入院患者の子の死亡リスク 一般集団における成人早期までの追跡研究	
執筆者	
Webb RT, Abel KM, Pickles AR, Appleby L, King-Hele SA, Mortensen PB.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Psychiatry. 2006 Dec;163(12):2170-7.	
キーワード	
親の精神疾患既往、アルコール・薬物関連障害、気分障害、総死亡率、デンマーク	
要 旨	
<p>目的 :</p> <p>親の精神疾患既往による子の総死亡の相対危険度を、子の年齢 (25 歳まで) や親の診断名、母親 vs. 父親の疾患、片方 vs. 両方の親の既往を考慮して推定する。</p> <p>方法 :</p> <p>中央人口登録 (Central population register) および医療出生記録 (Medical birth register) を用いて、1973-98 年の期間中のすべての単胎の生産児および死産児 (N=146 万) を対象とした。死亡は、1999 年 1 月 1 日までのものを記録した。1969 年までの親の入院記録を精神科中央登録 (Psychiatric central register) より得た。</p> <p>結果 :</p> <p>何らかの精神疾患で入院した者の子の死亡リスクは、出生時から成人前期にかけて上昇していたが、相対危険度は就学期間には弱まっていた。影響の大きさは子の年齢により変化し、生後 1 年までの間に最大であった。ハイリスクなサブグループは、両親共に精神疾患を有する乳児 (生後 29-365 日の児) および、アルコール・薬物関連障害を有する母親をもつ新生児 (生後 28 日までの児) および乳児、気分障害を有する母親をもつ新生児であった。一般に乳児期以降は、母親の精神疾患既往が父の精神疾患既往よりも子の死亡率を高くすると示唆するものはなかった。</p> <p>結論 :</p> <p>アルコール関連障害が子の過剰死亡に最も大きく寄与していた。これは父親では最も多く、母親では 2 番目に多い精神疾患分類である。いくつかの知見は予期しないものであった。たとえば、統合失調症とこれに関連した疾患を有する親を持つ子が、他の精神疾患の親を持つ子よりも死亡リスクが高いという証拠はみられなかった。一方で、母親の気分障害と関連した新生児期の死亡は、著しく上昇していた。</p>	